

アメリカ英語の特色(Ⅱ)

American English by Albert

H. Markwardt を中心にして

澤 田 照 徹

目 次

	頁
Ⅰ 平凡事の壮麗化……………	68
1) 家屋・飲食店に関するもの……………	70
2) 教育に関するもの……………	75
3) 職業に関するもの……………	77
4) 家庭内の食事に関するもの……………	81
5) 住居・店舗に関するもの……………	83
6) 社会的敬語に関するもの……………	87
Ⅱ 婉曲語法の隆盛……………	94
1) 婉曲語法隆盛の第1原因	
— 婦人の社会的地位の高いことと、婦人の言語使用上の慎しみ —	94
a) 性に関する婉曲用語……………	97
b) 洗面所に関する婉曲用語……………	99
c) 身体の部分に関する婉曲用語……………	100
d) 衣服に関する婉曲用語……………	102
2) 婉曲語法隆盛の第2原因	
— 不快感を伴う用語の忌避 —	102
a) 死・埋葬に関する婉曲用語……………	102
b) 神の冒瀆に関する婉曲用語……………	103
c) 学校教育に関する婉曲用語……………	106
d) 婉曲用語の隆盛に対するレヂスタンス運動……………	108
〔注〕……………	109
参考文献……………	112

アメリカ英語の特色 (Ⅱ)

I. 平凡事の壮麗化 (Glorification of the Commonplace)

植民時代の初期におけるアメリカ人の辺境生活が、アメリカ英語に与えた影響は広く、かつ深かったが、然しそれは一面的なものではなく、いろいろな異質の要因を含んでいた。時代が下って19世紀となつては、その世紀の殆んど大部分を通じて、旧大陸その他の地方からの入口入植が、段階的ではあったが常に続いて止まなかった。氣ぜわしく先を急ぐきこり (woodsman) やわな師 (trapper⁽¹⁾) は、辺境前線の荒野へと、その最初の攻略のくさびを打ち込んだ度毎に、後方から彼等の進攻と同じ速度で進んでくる文明に追いかけていた。そして彼等の2~3百哩の後方の領土では既に恒久的植民地の様相が生れつつあった。樫の木伐採の跡地や、ミシシピー川水辺の大草原地帯には、農場も設営され、荷物の船積み場は、間もなく周辺に拡がった村落の中心地となり、そこには地方的政治機関、学校、教会、そして図書館さえもが、未だ形成期の姿においてではあるが、少なくとも1個の組織体としての姿をとるに時間はかからなかった。芝居小屋 (theater) や、会館を具備した文化運動団体 (lyceum⁽²⁾ [laissem]) の講習会 (course) さえもが、きこりの斧よりずーと後方に置き去りになるようなことは滅多になかった。Constance Rourke⁽³⁾ (《1885—1941》アメリカの民族学の権威者) の記録に従えば、

「芝居興行師の団体は筏に乗り、オハイオ川やミシシピー川を下り、大きい町では宿をとり、小さい村でも屢々芝居を上演した。大型幌馬車でケンタッキーの山合いにまで乗り込んだ劇団もあった。そういう所では道路もいまだ險しく、途中で芝居道具や生活家財道具までも、車から降ろして肩に担いで運搬せねばならなかった...どこへ行っても芝居小屋があり、運悪く小屋の無い所では、人々は劇団のために、即席小屋を立ててやったし、黒人・白人・子供・大人の別なく、芝居の見物に集った。」

このような辺境生活者の生活慣習は、彼等の喋べる辺境言語に表われず

にはおかなかったし、もっと恒久的な文明に付きもののある種の言語的制限などは未だもなかった。止むない必要性のみが生み出した言語的発明の才は彼等の日常言語にまざまざと出てきた。ここで我々が彼等の持った辺境生活・辺境文明を眺める際には、同時に彼等の営んだ文明と、その文明の他のいくつかの分流をも併せ眺め、いやそれだけでなく、当の辺境文明そのものに対する逆運動 (counter-movements) ないしは反抗運動 (reactions) さえをも視野の中に入れなければならない。そうすることによってのみアメリカ英語の発展の原因と様相とを、その全体性において捉えることができるからである。

アメリカ民族の初期の生活において、アメリカ英語にその影響を及ぼした一つの重要な要素は、おおよそ「平凡事の壮麗化」(glarification of the commonplace) と名付けてもよいであろうところの民族意識であった。この意識は、多分、辺境文化 (pioneer culture) の二つの極面の中に根ざしていたと言ってよいであろう。

ここで先づ手始めに認めなければならないことは、アパラチヤ山系を西に越えた辺境地方 (開拓が東部海岸地帯に始まったばかりの頃は、その西部アパラチヤ山系方面を指し、開拓が西へ前進してアパラチヤ山系を越えた頃には、ミシシッピー川方面の湿地帯を、そして更に開拓が前進すると逐次西部の山岳地帯を指したという具合にその指すものも移動前進した) へ前進の足を進めた入植達の原始的な社会生活は厳しいかつ味気ないものであったということである。労働する昼間の時間は長く、仕事はいくらやっても遂に終わることが無いように思えた。娯楽らしいものは皆無に等しく、時には、人生とは寒気と飢えに対する絶えざる苦闘でしかないと思えたに違いない。幸か不幸か、他方において、初期の先駆者達の多くは、別の種類の人生をもまた既に経験していた。そしてこの経験の基盤の上に、Glorification of the Commonplace というアメリカ人の生活意識が自然発生的に展開し、その華麗な花を咲かせることとなった。こうした民族意識が言語的手段を通じてどのような姿を呈するに至ったかを順次眺めてみることにしよう。

1) 家屋・飲食店に関するもの

生活の安定性 (stability) も既に確立し、ある程度の文化的装具 (cultural accoutrements) をも備え持った東部海岸地方の大小の町々から、彼等は、やって来た人間であった。だからして、彼等の想像力が、彼等を取巻く単調で平凡そのものの環境に、過去に経験した華やかであった生活の、かすかすの長所の衣を着せて、その心を慰めるようになったこと、正に怪しむに足りないことである。

「平凡事の壮麗化」のこの趨勢を示す一つの著しい実例が saloon という用語のアメリカ的な奇妙な発展過程に見られる。

18世紀に先づフランス語の salon が、saloon と改作されてイギリス及びアメリカに流入した。フランスでは salon は、その当時も今もなお変わりなく「客間」(drawing room) を指して用いられており、¹アメリカでも saloon は借用当時は「客間」を指していた。ところが程経て特別に広い (large) 上品な (elegant) な種類の客間を指すようになって、屢々特別に公共的催しの行われる建造物の中の「客間」を指すようになった。イギリスでも saloon は、フランス語の salon が持つ優雅さ (elegance)・上流社交界 (fashion) との連想感覚を保持したままで、今日でも saloon car (セダン⁽⁴⁾ 型自動車), billiard saloon (玉突き場), dancing saloon (舞踊場), hair-dressing saloon (美容室) のような合成語の姿で残っている。

時が下って18世紀末から19世紀初頭にかけて、辺境では酒類 (liquor) を小売りで売ったり、コップ1杯いくらいくらで飲ませる施設を指す用語に窮したようである。Tavern という用語は、イギリスでは、宿泊設備を持たないで、単に酒を飲ませるだけの店を指したが、この語をアメリカでは liquor を饗する外に、宿泊設備を持つ町や村の宿屋 (hotel or inn) を指すのに用いたようである。これとは別に1704年という早い時代即ちアメリカ植民地に対してイギリスの法律がいまだ強くその効力を持っていた時代においては、public house というイギリス英語が既にアメリカへ

輸入せられて、しかもイギリス的用法の「酒場」(drinking place) という意味をもっと拡大して、売春宿 (brothels [brɒθəlz]) をも含み込んだ幾分か墮落した (somewhat disreputable) ものを指す用語となっていた。という訳で、アルコールを饗するが宿泊設備 (sleeping accommodation) を持たない清潔な場所を指して大声で呼ぶことのできるきれいな用語を探し回ったということに何の不思議もない。

かくしてアメリカ人が探し当てた用語は bar-room であった。この語が最初に記録に上ったのは1809年であるとイギリス人の旅行者の1人が記録している。確実な証拠は無いけれども、この bar-room という新造語も、とは言え、完全に満足の行く気品格調を具備した用語ではなかったようである。

従ってこの bar-room の出現後間もなく、groggery⁽⁵⁾ (強酒飲店) という語が鑄造されたが、これとても完全に清潔な用語とまでは受留められてはいなかった。

ところが、それから約30年後(1840年頃)になって、saloon という用語が「酒を饗する場所」の意味で東部海岸地方で始めて行われ、次いで驚くべき速度を以て西部に伝わって行った。この saloon という語がアメリカ国土で、いきなり清潔な酒場に適用されたものか、それともイギリスで行われていた saloon bar⁽⁶⁾ (接待用広間の一隅に設けた酒を饗する設備) という用語の暗示を受けて、アメリカで通用し始めたものかは、現在記録不足で断定はできない。

けれども重要なことは、始めは上流社交界・優雅・高い気品・お行儀・を連想させた saloon という用語も、アメリカの辺境社会の現実では、かなり薄汚い (dingy)・賤しい種類の施設について、しばしば使用されたということである。その結果として saloon という用語は、その地位身分から言って、不当な迫害を受けて、「意味の墮落」(pejoration) を苦しまざるを得なかった。

saloon という用語がアメリカでどのような迫害を受けながら使用されたかを眺めることは甚だ重要なことである。それがアメリカ英語の重要な

特色である「平凡事の壮麗化」を如実に示しているからである。

アメリカでは saloon という語の意味内容の移行が続き、特別に広大で豪華な客室から、街の巷にある「酒場」（英語の public house）を指すようになった。言い換えれば、労働者などの集る単なる市井の酒場を指すに、豪華絢爛たる客間を想像させる用語の saloon を用いることによって平凡事を壮麗化しようとした。このことは L. O. Brastow 教授の書いた 'Representative Modern Preachers'（現代一流宣教師）の中の次のような記事にも表われている。

'The soldier had a considerable sum of money when he entered the saloon, and he continued drinking there until two o'clock.'（その兵士は彼が saloon に入って行った時には巨額の金を所持していた。そして2時迄その店で飲み続けた。）'He was a vigorous advocate of temperance, and was soon instrumental in clearing the town of two saloons that had thrived there.'（彼は禁酒運動の精力的な主張者であった。そして間もなく、その町に、それ迄繁昌していた2軒の saloon を町からまっ殺するのに大いに役立った。）

また Mencken⁽⁷⁾（《1880—1956》アメリカの批評家・言語学者）も、この点に関して、「私の知る限りでは、今日アメリカには、清潔で偽装をしてない客室（saloon）なんてものは一つもない。」と述べている。一方 saloon の経営者自身も、自らを「サルーンの店主」（saloonkeeper）と名乗ることを嬉しいことだとは思っていなかった。サルーンのバーテンダー（bartender・アルコール類調合・給仕するボーイ）もまた、自分の職業を榮譽あるものとしなくて却って別の新語を用いて隠そうとした。そして1901年には「治安公報」（the Police Gazette）によって制度化された bartender という用語の代りに、職業語（occupational term）として bar clerk（酒場店員）とか、mixologist（酒類調合師）という呼称を代置しようとした名称変更運動が行われたが、結局この運動は不成功に終わってしまった。

とは言え、すべてこのような壮麗化の趨勢において重要なことは、新しいそして幾分でも格調の高い用語を用いることによって、威厳と感じの良さを与えようとする試みがあったことである。時には現場の状況が、理性

的に考えてみるときに、用いられた用語の持つ格調に達しそうもない場合にも大いに用いられた。

アメリカで、アルコール飲料の販売と飲用反対運動が頭をもたげるにつれて、「反サルーン連盟」(Anti-Saloon League) というもののまで結成され、'saloon' は腐敗 (corruption) と邪悪 (evil influence) の代表物 (symbol) となった。「禁酒運動」(Prohibition movement⁽⁸⁾) の主要なねらいの一つは 'saloon' を国土から根絶することであった。そしてその運動も14年あまり続いた後では、禁酒法の廃止 (1933) と共に消滅するに至り、結局アルコール飲料も人の口に戻ってきたけれども、saloon という用語の意味内容は今日に至っても依然として、大衆の集る「酒場」(public house) を指している。因にイギリスでは、'saloon' はこのような意味では用いられず、昔のままの、大広間 (ホテルなどの)・社交室 (汽船などの) や特別客車 (鉄道などの) ような、はでな施設を指すに用いている。

「平凡事の壮麗化」というアメリカ英語の持つ特色を示す実例は、'opera house' (オペラ劇場) という語にも発展した。生憎この用語の使用の実際上の情報に関しては、その使用の年代と資料をアメリカ英語辞典からは殆んど得られないけれども、それにも拘わらず、19世紀初めから終りまで、そして20世紀に入っても、多くの小さな町々で、町民が利用した芝居小屋や市民会館を指すのに、'opera house' という語を用いることが習わしになっていたようである。Schlesinger⁽⁹⁾ (『1888—1965』[米]著述家) と D.R. Fox 共著の History of American Life 「アメリカ人の生活史」) は、この語がどのような範囲の施設に対してまで適用されていたかをある程度まで示している。彼の引証記事は1870年のものである。

Y.M.C.A. 会館屋敷 (Y.M.C.A. quarters) と官報印刷局 (the Gazette office) の街角を回ったところにある裁判所の庭の後ろ側に、市民使用の他の建物が、しょんぼり立っていた。それは家畜の小屋に似た煉瓦造りの家 (barnlike brick structure) で、拘置所の建物を視野から遮ぎるように建てられており、内部は市長室、観覧席と舞台でできていた。役所の布令でこの建物は "op'ry house" (opera house) と呼ばれることになっていた。

いうまでもなく 'opera house' という名の建物はアメリカの各地に散在していたが、その中で演ぜられる出し物は opera の名に相応しいものは皆無であった。恐らくその地方地方の高等学校の演劇部員が時たま上演したにしてもそれは Gilbert⁽¹⁰⁾ と Sullivan⁽¹¹⁾ の合作の喜劇位のものであったろうと思われる。Lynd 夫妻⁽¹²⁾ (Mr. Lynd (1892—) コロンビア大学教授; Mrs. Lynd (1897—)) の書いた 'Middletown' (インディアナ州・マンシュー地区にある町の名) についての彼等の社会科学的分析による論文の中で、1890年代にオペラハウスで上演された芝居名一覧を載せている。それによれば、「電話交換嬢」('The Telephone Girl')・「庭の垣根を越えて」('Over the Garden Wall')・「罪悪なくして罪のある」('Guilty Without Crime')・「黒い悪漢」('The Black Crook'⁽¹³⁾) と、上演禁止不可能な「トム叔父さんの小屋」('Uncle Tom's Cabin') などあった。

このようなことから判断すると、小さい町の芝居小屋 (small-town American theatre) を指すのに opera house という用語を用いていたようである。元来 opera house とは、opera の上演される建物のことであるが、そもそもの opera とは一對どういうもので、どういう雰囲気を伴ったものだろうか。

opera とは喜劇 (comic) または悲劇 (tragedy) で、その根本の構成要素は音楽であった。もう少し詳しく述べてみると、それは、全く、もしくは大部分が歌で構成された劇であって、吟誦ふうの独唱・合唱・重唱・三部合唱などでできており、管絃楽曲の伴奏・前奏・間奏を伴ない、それに、舞台はふさわしい装置を備え、役者はふさわしい衣裳を着け、ふさわしい所作を演ずる仕組みのものであって、その豪華絢爛さは目を奪う劇中の劇である。このような格調の高い演劇を上演する劇場そのものの内装外装設備の豪華さはまた通常目を奪う壮麗さで輝いている。このような連想を伴わずには惜かない 'opera house' という用語を用いて、納屋に等しい小屋を指したアメリカ語の用法は、単なる酒場 (drinking establishment) を指すのに 'saloon' を用いた背景に存在した傾向と全

く同じ傾向があったことを示している。即ち珍らしくもない極く平凡な普通のものを、それが実際そうであるよりも、もっと素晴らしい(*grander*)ものに見せようとする願いがあったからでもあろうし、この願いは、多分、その施設が将来はその名前の持つ豪華さ、格調の高さにふさわしい内容を持つ立派なものに成って欲しいという願いも併せ持っていたであろうことは容易に想像できる。

2) 教育に関するもの

気品の高い用語を用いて、ものを表わそうとするこのようなアメリカ的風潮は、教育施設 (*educational institutions*) や、各型体の教員養成学校を指す用語に関しても見られる。そして実際に、そうしないではおれない何かの「精神的衝動」(*impulse*) が有ったとすれば、それは二重の「衝動」であったであろうと言える。

第1の「衝動」は、下級から上級へと一系列をなす専門的研究所などの研究所にも、実際より1階級上位の名前を付けるか、あるいはイギリスにおいてならば、そのような評価価値は認めてもらえないようなものであっても、アメリカでは威厳 (*dignity*) を持たせるために壮麗化を行ったということである。このことは *college* という語の意味の一般化 (*generalization*) の項で既にその一部を説明したところであるが、このような風潮が実際にどのように働いたかの実によく分る実例を、ミシガン州の教育制度によって見ることができる。この州では、1930年代の10年間に、州内の師範学校 (*normal school*) が、ただ1校を除いて、総て公式に教育大学 (*College of Education*) と命名された。そして1950年代には修飾詞の '*of Education*' をも取去って、完全に大学 (*College*) と呼ぶようになった。このような命名の変更は、これらの大学の各々の中に、教養科目 (*liberal arts* (専門科目に対し) 哲学・歴史・文学・自然科学・語学など) のカリキュラムを設置して、それを履修した者には、「バチェラーの称号」 (*bachelor's degree* ⁽¹⁴⁾) を与えるという学制を認めることによって、制度上名実共に大学 (*College*) となるという結果を伴った。

とはいえ仮にこのような名実兼備の制度が制定されなかった場合でも、*'school'* という名前よりも *'college'* という名前の方が、文部省当局にとっては、紛れもなく、より好ましい、且つ恥ずかしくない呼び名のように思えたという現実が存在していた。*'university'* (総合大学) という用語についても、正にこれと同じ理由から、*college* と類似の拡大使用が行われたということは、1870年代に住んでいて、途方もない認識不足漢だったアメリカの1 愛国者の大得意の陳述から容易に察知できる。前述した Schlesinger and Fox が行った引用記録によれば、こうである。「英国には *universities* が2つあり、フランスには4つ、プロシヤには10個、そしてオハイオ州に37個ある」。また *'high school'* という用語は、アメリカ的用法では、1824年に始まっているが、イギリスでは、中等学校 (*secondary school*) に対してはこの語は滅多に用いていない。そしてまた、ヨーロッパでは、*'high school'* は必ず決って単科大学 (*college*) か総合大学 (*university*) 級の教育機関を指している。とはいえ、考えてみると、この *high school* のアメリカ的用法は、スコットランドに、その起源を持つているようである。このように1階級上位のものを指す呼称を適用して、そのものに威厳を持たせることがアメリカ的用語法の第1の「衝動」であったとすれば、第2の「衝動」は、下級から上級への系列を持たない商業学校 (*trade school*) や、職人・技工の訓練に携さわる他の単一の教育施設に対して、過去の時代に専門的なものを教える施設 (*academic institutions*) にだけ適用した呼び名を、そのまま取ってきて与えようとしたことである。ここでもまた論証となる資料に乏しいが、然し速記者や秘書を養成するようないかさま事業 (*stenographic and secretarial venture*) に与える呼び名としての *'business college'* 「実務大学」という用語が、1865年という早い時代に既に記載されている。*'barber college'* 「理髪大学」という用語に関しては、どの辞書にも記載してないのは不思議であるが、実際にはこの用語は20世紀初期にあっては合衆国のいくつかの地方では一般に通用していた。この語と姉妹関係にあるもの、即ち、専らパーマメント・ウェーブの秘術である美顔術 (*cosmetology*)

を初心者到手ほどきする施設を指すのに 'schools' や 'college' を用いる用法は流行が近代のものだけに、年代を溯上っても1920年代以前には出現していなかったであろう。

3) 職業に関するもの

職業的専門用語 (occupational terminology) もアメリカにおいては、教育諸施設の項で既に述べた一連の変化と全く類似した変化の過程を経てきた。即ち先づ以前に用いられた用語の、適用範囲を拡大して使用し、次いで新用語を鑄造するという過程を辿った。例えば doctor や professor という用語はその著しい例である。これら両語は、イギリスでは、その使用は注意深く制限されており、外科医 (surgeons) は、たとえ M. D. (Medicinal Doctor=Doctor of Medicine 医学博士) の学位を持っていたとしても、Mr. (Mister) という呼び掛け敬称を用いるし、「教授の職」(professorships) も、当然なことながら、アメリカ合衆国においてよりも、その数は遙かに少い。ところがアメリカでは、歯科医 (dentists), 整骨治療師 (osteopaths[ˈɒstiəpəθs]), 指圧師 (chiropractors[ˌkaɪəˈpræktəz]), 足治療師 (chiropodists[ˌkɪrəˈpɒdɪsts] 《まめの処置、つめ切りなど》), 獣医 (veterinarians) は、いずれも doctors である。おまけにアメリカの大学の各種大学院 (graduate schools) における博士号授与 (doctorate) の、途方もない拡大と、アメリカの単科大学と総合大学がやっている名誉上の学位 (honorary degrees) 授与の放漫さが、現実にはそれに値しない水準のものにまで及んで、doctors の数の増大をもたらしている。しかも、the Dictionary of Americanism が示しているように、19世紀末になっては、木材伐出人宿営所の料理人 (logging camp cooks) にまで、Doctor という完全語の敬称を付けたり、その刈取語 (clipped) の Doc. を付けたりする誠におどけた (jocular) 適用例は除外しての話である。

Professor という語の用法もこれと全く同じ方向で拡大した。実際に、この語は、Doctor という語より、もっと早い時代から始まり、もっと広

い範囲に適用が拡大した。ある商魂たくましい書籍販売業者が、既に1774年に、自分のことを、「書籍せり売り業教授」(Professor of Book Auctioneering) という肩書を付けた者もあった。そして実際に19世紀に出たアメリカ英語の小辞典の編輯者の編輯企画は、いずれも、ダンス教師 (dancing teachers), 魔術師 (magicians) や、骨相占師 (phrenologists) にまで、Professor の称号の拡大適用が行われたことを示している。確かに小さい町では殆んどどの町でも学校 (schools) の視学官や校長ばかりでなく、小学校の男教師 (male grade-school teachers) にまで、必ず決って、Professor の肩書を使っていた。

このように doctor や professor の肩書・敬称を放漫に使用した必然的結果として、却ってその肩書に値する正当な資格者が、そのような肩書を用いることを嫌うようになった。それは総ての専門的職業人にも、またそうでない人々に対しても、寧ろ mister を使用することを奨励するために ('for the encouragement of the use of *mister* to all men, professional or otherwise') ヴァージニア大学 (the University of Virginia) で組織され、真面目そうで人を食った (mock-serious) 一群の人々によって発意された一つの敬称改正運動の影響でもあった。

Professor という用語の専門職業分野における用い方は、アメリカ南部と北部とでは大変な違いがあって、北部での用法は、稀少価値 (scarcity value) と呼んでよいものの活躍の著しい実例を示している。北部の単科大学や総合大学においては、教職員 (teaching faculty) の中に、博士号 (doctorate) を持ちながらいまだ「教授の位階」(professorial rank) を得ていない者が数多くいる。従って教授の地位と博士号とを併せ持った者は、例外なく、professor と呼び掛けられる。ところが南部では、つい最近までは、教授の地位にありながら、学位 (doctor's degree) を取っていない教職員が、殊に単科大学では多数居った。このような南部地方においては、教授の地位と学位の両方を兼備している者は通常 doctor を付けて呼び掛けられている。このように同じものが北部では professor, 南部では doctor と呼ばれるのは、いずれもその稀少価値のゆえである。

話しを「平凡事の壮麗化」につながる語の拡大使用の本論に立戻ること
にしよう。ある意味では professor と doctor という語の拡大使用は、
アメリカ人が敬称使用 (honorifics) に熱心であるということと緊密に結
びついている。しかしここでアメリカ人の敬称使用の熱意の論議に立入る
ことは暫らくおいて、所謂専門職的肩書 (professional titles) や、職
業的術語 (occupational terms) の鑄造について、更にそれぞれ数語づ
つ眺めてみることにしよう。新語鑄造の領域において屢々その例として引
合いに出される Mortician (葬儀屋) という語は、physician (内科医)
という語と音声上の類似があって便利であるため、1895年頃に造られたよ
うである。そしてこれと同じ音声上の便宜さという新語派出の過程を辿っ
て、beautician (美容師)、loctician が作られ、それからまたいづれも
少しばかり奇怪な (bizarre [bizɑ:]) 語であるが、六つ、もしくは八つの
派生新語が作られた。mortician という語の起りについては、その仕事
が専門職たるの身分的資格 (professional status) を獲得して威厳を付
けたいという望みと、それに死と埋葬とに関連した用語 (terms) の代用
をしてくれる婉曲語句 (euphemism) が無いものかと、長期に亘った、
しかも絶えざる強い探求心があって 'death' という語を忌み言葉と考え、
その代用として同じ意味のラテン語 mort に、接尾辞 ician (……を学
んだ人・達人) を合成したということは有り得ることである。煎じ詰めれ
ば、イギリスで葬儀屋を指すのに用いている undertaker という用語に
は、いやなだじゃれ (gruesome pun) 的なものがあるが、アメリカ人の用
いるところとはならなかった。イギリスではこの語は1698年以来ずっとこ
の意味で用いられているが、同時に funeral furnisher (葬具しつらえ
屋) という用語も併せ用いて、利き目を柔らげようとしている。

擬似専門職的用語 (pseudo [sjú : dou]-professional terms) のアメリ
カの鑄造の、もう一つの、これもまた屢々引用される例語であるが、
Realtor ([rí : ɛltə] 不動産業者) は、使用上幾分煩らわしい英国的 real-
estate agent (不動産売買斡旋業者) という用語の代用をする簡単な単
一語で便利であるという理由で、言語使用に融通を利かせることの好きな

寛容心のある人々によって受け入れられたとも言えるが、しかしこの解釈は、てっち上げのこじつけによるもので、寧ろこの語の根拠は Sinclair Lewis ⁽¹⁵⁾ (『1885—1915』アメリカの小説家) が書いた 'Babbit' という小説の主人公 Babbit という教養の乏しい実業家のしゃべるセリフの中で "We ought to insist that folks call us 'realtor' and not 'real-estate men'." (『我々のような業者のことは real-estate men と呼ばないで realtor と呼んで欲しいと強く主張したい。』) と述べているが、このようなセリフをしゃべる人物そのもののほうが realtor の本物を、より正鵠に表わしているように思える。Lewis の書いたこの文句は1920年のものであるが、realtor という語が新しく鑄造されたのは1915年である。

科学技術 (technology) に対するアメリカ人の関心の強さは、engineer という語が奇妙な、かつ、数多くの合成語の姿で用いられて、圧倒的人気を博していることから察知できる。鉄道建設事業に関して engineer という語をアメリカ人が早くから使用したことは、やがて訪れる事態の先ぶれでもあった。イギリス人は、この語よりも耳に聞いて退屈な音調を持った engine driver という用語で満足しており、外洋航行船舶の機関士を言う時にだけ engineer という語を適用している。ところがアメリカ人はこの語の鑄造以来今日まで啞然とする程に多数の合成語を作って使用し、その数は実に2000語を悠に越えている。H. L. Mencken (前出) の報告書によると、「ねずみ」や「ごきぶり」(cockroach) 退治の仕事をする撲滅師 (eradicators) まで、the Extermination Engineers (『害虫駆除師』) という名称を用いて全国組合を結成している。更に patent engineer (公有地払下げ証書作成師), erosion engineer (『波、水流などの侵食防止技師』), casement window engineer ⁽¹⁶⁾ (開閉窓製作技師) のような技師というにはおよそ縁遠い仕事に従事している者にまで engineer の名を付けた用語法は、この語の適用の雑多性を説明している。'engineer' の使用の運動に関して言えば、ビルディングや学校の校舎などの管理人 (janitors) が、1939年に、ミシガン州のプレゼント山 (Mt.

Pleasant)で大会を催して、今後は自分達の名称を 'engineer custodians' (守衛技師) に改めようという議案を提出している。

呼称に用いる用語を壮麗化することによって、当座の満足感を当事者達は抱いたようである。何故ならば janitor という語は、その発生を歴史的に辿ってみると、丁度 realtor や mortician という語が生れたと同じ課程を辿っていたからである。即ちこの語は、少々小細工を施したような仕方ではあったが、神話上の人物である Janus ([dʒeɪnəs] 門の守り神) から引き出されて、始めは門衛 (doorkeeper) または荷物運搬人 (porter) を指すのに用いられ、次いでアメリカでは建物の床などの清掃人 (sweeper of floors) や火たき工 (builder of fires) を指すのに用いられるようになった。イギリスではこの最後の意味では caretaker (留守番) という語が用いられている。上に述べたビルの管理人組合 (Janitor's Institute) が提起した要求から判断して明らかなように、1939年頃は janitor という用語は、もうすっかり管理者という良い意味が剥がれ落ちて、engineer とか custodian (保護者) のような語の方が望ましい響きを持つものとなっていた。アメリカの1大学で janitor から custodian へと門衛の呼び名が変わっていった興味ある一連の実例を眺めてみよう。その大学での科学図書館 (research library) の館長の肩書 (title) は、初めは Custodian であったが、それも籍が下っていったので Dictor (監督者) に変わった。Custodian という肩書も次第に、図書館の守衛 (janitor) と混同される恐れが生じてきたからであった。

平凡事の壮麗化のアメリカ的用語風潮は職業上のことで忙しく立働く仕事日に関する (work-a-day world) 用語ばかりではなかった。アメリカの家庭生活上に用いる用語にもこの風潮が入り込み、今日でもなおこの風潮のいくつかの例を残している。

4) 家庭内の食事に関するもの

先に掲げた the Lynds (リンド夫妻) は 'Middletown in Transition' (「変貌しゆくミッドルタウン」) という社会学的研究論文の中に、今

日なお刊行中の1新聞紙上の記事から、次のような非常に現実的な家庭内の姿をよく示している引用の抜刷り (excerpt[éksə:pt]) を、ある理由で引合いに出している。そしてそれはアメリカ人の家庭内で ‘supper’ という用語が人気を失って遂に、‘dinner’ という用語を用いて夕方に摂る食事を壮麗化しようとする努力の前に屈し去った一面を示している。

The time will easily be remembered when masculine and juvenile members of a household received glaring looks punctuated by lifted eyebrows when they forgot in the presence of guests and referred to the evening meal as ‘supper’. (家庭内で食事運びのボーイや、年のいかない子供達が、お客の面前で、夕方の食事を ‘dinner’ 言うべきをうっかり忘れて ‘supper’ と呼んだ時に、「ちがいますよ」という張詰めた目付きで、にらまれた時代のあったことを容易に思い出することができるであろう。) But time has changed that. Smart folks⁽¹⁷⁾ are having buffet ([báfit]) suppers,⁽¹⁸⁾ and many. . . (しかし時代の流れが様相を変えた。身なりのきちんとした人々もセルフサービスの夕食を食べており、また多く人々もそうである。)

ある種の献立を持った supper が最近の1950年この方、その声誉 (prestige) を取戻してはいるが、ここでは暫くこの種の特別の supper のことは無視することにして、食事の名称の推移を、もう少し詳しく迎ってみることにしよう。時代が溯って、1920—30年代においては、殊に婦人 (women) は、夕方に摂る食事 (evening meal) を、中味は現実に supper の価値しかないものでも格調の高い ‘dinner’ (一日のうちで最もぜいたくな食事; 正餐) と呼び、正午頃摂る食事 (midday meal) を、中味は軽い lunch でも、‘luncheon’⁽¹⁹⁾ (《殊に正式の》午餐) と呼ぶことが適當であると考えていたと断定してもよい。これにまた、このような昼の食事・夕方の食事の両方ともに、美辞麗句を用いた用語法 (terminology) は1950代の今日では、昔の呼び名であったところの noon meal を指す ‘dinner’ と、その揃い語である evening meal を指す ‘supper’ を食卓用語から追放してしまったと断定して差支えはない。

昼食が ‘dinner’ から ‘luncheon’ へ、そして夕食が ‘supper’ から ‘dinner’ へと、食事名の移り変りは、アメリカの家庭内で実際上の食事習慣が、昼の時刻には家庭の外で簡易食をとり、夕刻帰宅してから、1日の

うちで最大の食事をするような生活習慣となってきたことにもよる。このような新しい食習慣は、アメリカの社会生活の急激な都会化と産業化が引起したものである。そしていうまでもなく、この食習慣は社会の現実と一致したものであった。過去の時代即ち今世紀の初頭のいまだ社会が都市化産業化しない以前の頃には、農村や地方の小都市の家庭では、1日の最大の食事 (heaviest meal) は、昼の時刻 (at noon) に摂り、そして夕方に摂る食物は、ほんの簡易な軽食 (repast) であった。

この辺の事情に関して次のことに注意してみる事は面白い。夕方の食事の名前の 'supper' が、イギリスにおいてよりも、50~60年も遅くまでアメリカでは一般に流通していた。そしてイギリスとアメリカでのこの用語消失の時代的ずれを、19世紀の中頃にアメリカを旅行したイギリス人でそれと気付いて記事として取上げた2人の旅行者があった。一人は Gosse という旅行者で、彼は Alabama 州 (アメリカ南部の州) から故郷に宛てて書き送った手紙の中で述べている。'The meal which we are accustomed to call "tea" is by Americans, universally, I believe, called "supper", and it is the final meal, there being but three in the day'. (イギリスで普通に "tea" と呼んでいる食事は、アメリカではどこでも "supper" と呼んでおり、そしてそれは日の最終の食事である。そしてアメリカでは食事を日に3回しかとらない。) その後5年たって1864年には C. Geithe という旅行家も、故国に向けた手紙の中で、'I chatted...till tea, or as they called it, supper'. (わたしは tea の時刻まで、言い換えると、アメリカ人が supper と呼ぶ食事の時刻まで雑談した。) と記している。

5) 住居・店舗に関するもの

話題を住居に関するものに移そう。イギリスにおいて、家庭で客を迎え入れる最上等の部屋を 'parlour' ⁽²⁰⁾ と呼んだ時代があった。ところが時の経つうちにこの語も次第に人気を失い、代って 'drawing room' (応接室) や 'sitting room' (居間、茶の間) という用語が用いられるように

なり、ただ 'bank parlour' (銀行の来客用応接室) とか 'Mayor's parlour' (市長室), 'parlourmaid' (部屋付き給仕人) などのような合成語の形で、ある種の専門用語として残っている。また parlour と言えば寧ろ家族が集って親しみ合うための小さい方の部屋を指したので、従ってもっと上等で来客用に飾り立てた (pretentious) 部屋は 'drawing room' と呼んだのである。

ところがアメリカでは、'parlor' という用語が入ってきたばかりの時期には、この語を、家の中の来客用に飾り立てた最上の部屋を指す壮麗な名称 (grandiose name) として用いた。

とはいえ、アメリカで住宅建築の様式が変化するにつれて、部屋の呼び名もまた変ってきた。事実19世紀を通じて起った最も著しい変化と云えば、週日には滅多に使用されないで、たまに客を迎え入れる場合とか、日曜日祭日などだけに使用する 'best room' の消滅、即ちアメリカ人が 'parlor' と呼んだ部屋の消滅であった。それより以前 'parlor' という部屋がアメリカ人の家庭に慣例として設けられていた間は、家族が一家団らんするための部屋は 'sitting room' (居間) と呼んで格式の上で区別していた。けれども滅多に使用しない parlor を家屋内に一つの部屋として設けなくなっただけからは、この 'Sitting room' という用語を、田舎風な (rustic), 旧式な (old-fashioned) 用語として退け、'Living room' を用いるように変ってきた。ただこの 'parlor' という用語は、その語の誕生の時代からの持ち前の華麗さをそのまま保持しながら、アメリカ人の家庭の外に出る結果となり、hairdresser's parlor (理髪店) とか tonsorial parlor (理髪店), beauty parlor (美容院), あるいは fruit parlor (果物店), undertaker's parlor (葬儀屋の建物内の一部で葬儀を行う特別高級室) のような合成語として用いられている。この辺の状況について次の記事は読んでみると面白い。

'In 1904 there were but three shoe-shine parlors in the hands of Greeks. . . But the line in which the Greeks have made their greatest success is in the fruit stores, candy kitchens and ice-

cream parlors'. (Dr. H. P. Fairchild, Greek Immigration to U. S. 127) (1904 年にはギリシャ人の経営している shoeshine parlors 《靴磨き店》は、僅か3軒しかなかった。…然しギリシャ人が最も繁昌した店は果物店、キャンディ店、それに icecream parlars 《アイスクリーム店》というような職業の領域でである。(H. P. Fairchild 博士著「ギリシャ人の合衆国移住民」127頁))。この外、鉄道用語として用いられ、その車に乗るには料金も高く、内部が立派にしつらえられた客車を特に parlor car (特別客車) と呼んでいる。政治用語の中にも parlor という用語が入って行って、barlor socialist (お上品な社会主義者), parlor democrat (お上品な民主主義者) となり、Noah Webster の Dictionary の中でも、'a parlor match' とは 'a friction match which contains little or no sulphur' (頭部に硫黄が全然付いていないか、付いていても、ほんの少しか、あるいは全然付いていないすりマッチ)。…'In striking a parlor match the head fell off and fell upon the fringe of a couch cover, which flared up' (parlor match 「極上マッチ」を擦ると頭部の硫黄が脱落して、ソファァーのカバーの縁に落ちて、パット燃え上がった。)と説明記事を加えており、このことから parlor という用語が指す実物がどんなものであるかが分り、parlor とは、用語のみ壮麗で、その名称を持ったものは用語の華麗さに反して可成り劣ったものであることが推し測れる。

続いて、家庭内で使用する什器の名について、眺めてみることにしよう。起りはポルトガル語であって、後にオランダ語に借用され、最後にアメリカ英語となった経歴を持つ cuspidor ([kʰáspidɔːr] たん壺 (spittoon = spitbasin)) という語は、1875年に、Atlantic Monthly (月刊大西洋) という雑誌に、'Here [on a Miss. steamboat]. . . bright, fanciful 'cuspadores' instead of a broad wooden box filled with sawdust.'

(ここミシシッピー川の汽船の上では、おが屑を詰めた木製の幅広の箱ではなくて、色の彩やかな、しゃれた恰好の 'cuspadores' (カスパドール) というつば吐き容器) という記事を載せている。ミシシッピー川に浮ぶ汽船

の上で用いられた、いきな姿に明彩を施したつば吐き容器の ‘cuspadore’ という呼び名のお蔭で、明彩を施さないたん壺まで人気を博するようになり、倶楽部とか国会議員集会所は勿論、多くの普通の家庭内にまでたん壺が設備されて、家庭の通常の調度品となった時期もあった。しかしこの語が流通したのはアメリカだけであって、イギリスへは何とはなしに微妙な感じを与える (somewhat delicate) ‘cuspador’ という語は1781年という早い時期に輸入されたことはあるが、広く流通するには至らなかった。

最後に、一つには上品な語感を持つ用語を用いたいというアメリカ人の好みと、二つには人の心を懐しい我が家を思わせる語に頼りたいという郷愁とが相結合してその結果として、アメリカではイギリスにおいてよりも、一層広く ‘home’ という語を用いるに至った。19世紀末の時代になって、Gerge Warrington Stevens がこの点に関して注解して、‘As to the home, the American talks about it a great deal. (家庭 (the home) なるものに就いて言えば、アメリカ人は home というものをよく話題にする。) He never builds himself a house; he builds himself a home’. (彼が自分で造るものは house「家屋」ではなく home なのである。) 従って居住用家屋の土建請負人 (contractors for domestic dwellings) は, home builders であり、家屋の所有者 (householder) は homeowner であり、衣類プレス機具、真空掃除器、皿洗器、アイロン、その他のアメリカ人が家庭内で用いる雑多な器具類は home appliances⁽²¹⁾ である。また料理学校、裁縫学校で教える内容は homemaking⁽²²⁾ (「家政」) である。そして世間並みの家庭よりも、少しばかり教育のある家庭 (a more learned level) では、home economics (「家計」) なのである。家庭の「主婦」はイギリスでは house wife であるが、それまでも、Mencken の指摘するところでは、ロングアイランド島⁽²³⁾ の婦人倶楽部連合会 (the Long Island Federation of Women’s Clubs) の行った公式の決議によって home maker と呼称するに至った。更に貧困者救済諸施設 (institutions of refuge) や、不良青少年収容施設は、例外なしに homes であり、今日では死人埋葬の儀式を行う建物に対して

は、とりわけ home を用いて、funeral home⁽²⁴⁾ と呼んでいる。有名なのは 'The Chapman Funeral Home' という葬儀屋で50年間も営業を続けたと言われている。

6) 社会的敬語に関するもの

言語使用における壮麗化の傾向を、今度は社会生活の方面で探ってみよう。アメリカを訪れた旅行者は、アメリカが独立した1776年の頃の旅行者も含めて、合衆国が一方において、その礎石の上に建国した「平等の原理」(theory of equality) と、他方において「名誉の職務の肩書」(titles of honor) に対するアメリカ国民の抱く好み (fondness) との間の根本的とも言える矛盾に非常な興味を感じ、それを指摘し続けてきた。Crevecoeur ([krév-kóer] (1735—1813) アメリカに帰化したフランス人で著述家・農学者) は、『彼のアメリカ革命以前の経験を反省して、『革命以前の時代には lawyer, merchant, farmer という呼び掛け語を用いて、それぞれの職種を持つアメリカ人に話しかけることは、合衆国が国民に許し与えた最も立派な (fairest) 敬称であった』と、たくましくも (stoutly) 述べている。ところが1840年以降の言語観察者達は、これとは全く相反する資料を入手していた。例えば時代が下って1896年に、George Warrington Stevens は、アメリカ人が異状と思われる程に立派な肩書にしがみ付く性格を見て、少しばかり不機嫌な言い振りで質問を提起し、'Why does he cling all his life to the title of some rank or office he had held twenty years ago?' (何故にアメリカ人という人種は、20年も前に自分が持っていた社会的地位や役職の肩書に生涯しがみ付こうとしているのだろうか。) と言っている。ところがこのような疑問に対しては、実はそれより何年も以前に、二つの解答が出されていた。そしてそれ等の解答は、疑いもなくある程度の正しさを含んでいる。その一つは、1849年にスコットランド人で Alexander Mackay という旅行家がアメリカ人を弁護して述べた記述で、'the fondness for titles which they display is but a manifestation of the fondness for distinction

natural to the human mind' (アメリカ人が肩書に憧憬する心情は、人間感情に自然な榮達への憧れが外に表われたものに過ぎない。) という弁護論であり、もう一つの解答は、それより約10年後に、Thomas Collier Grattan⁽²⁵⁾ (《1792—1864》アイルランドの作家) が与えたもので、先の Mackay の解答とは少しばかり違った意見のもので、'Were a well-established national self-reliance felt among the leading men in the United States, there would be none of the melancholy parodies of "High Life", none of the yearnings after aristocratical distinctions which are now so flagrant'. (合衆国の一流の人士が、既に十分に確立した民族的自信を持つに至っているとすれば、従来アメリカ人が憧れた "High Life"⁽²⁶⁾ ([米]《輕蔑》上流社交界生活) というような、聞いて陰気な嘲弄的もちり文句 (parodies) に対しては、やがてはアメリカ人も憧れを持たなくなり、今日なおその風潮の衰えていない貴族として著名人に成る (aristocratical distinctions) ことへの憧れも持たなくなるであろう。) と述べている。

アメリカ的名譽の敬称 (honorifics) は、考えてみると、12世紀に、ドイツ地方のキリスト教徒達で編成し、パレスティンに侵攻した十字軍の兵士で武勲を立てた勇士や、軍人でない牧師に対してまでも、Knights (騎士) の称号を叙勲して、その上征服した土地の領主の権能を与えたというドイツ式名譽の敬称 (Teutonic usage) の流れを汲んだもののようである。

アメリカで用いられている名譽の敬称には、Stevens が指摘しているように、先づ第1に Colonel ([ké:nəl] 陸〔空〕軍大佐) のような、いんちきな軍人肩書 (bogus military titles) がある。Colonel はアメリカでは特に軍人と関係なしに、州の知事や高級幹部に任命されれば与えられる敬称である。この称号を得た時の任務はと言えば、その職務への就任式に行なう行列に加わる時や、他の公式の役務に従事する時に、礼服を着用して馬や車に乗る義務があるというだけである。この敬称のアメリカ的使用について、その用語習慣を知らない外国人には仲々分ってもらえず

に、そのために冷汗をかいたアメリカ人の次のような告白談がある。それは1914年6月に Col. House (《1858—1938》アメリカの Wilson 大統領の代理特使) が、ポツダム (Potsdam) の国際会議に列席した時、彼が持つ ‘Colonel’ という肩書のため苦勞した模様を自分で語ったものである。

‘I had cautioned Gerard [the U. S. Ambassador to Berlin] before coming to Berlin not to use the title of “Colonel” when referring to me or when introducing me after I arrived. (私はベルリンに出掛ける前に、ベルリン駐在アメリカ大使の Gerard 氏に向って、ベルリン到着後に、私を指して名を言う時とか、相手に私を紹介する時には、‘Colonel’ という肩書を付けないようにしてくれと頼んでおいた。) This did not serve my purpose, for Bernstorff [the German Ambassador to Washington] had cabled of my coming, so I became “Colonel” immediately. (ところが、こうした前工作も結局無駄だった。というのはワシントン駐在ドイツ大使の Bernstorff が、ドイツへ打電して私が出掛けて行くことを報告してしまった。その結果私は即座に ‘Colonel’ になってしまった。) Most of my time at luncheon was used in explaining to my neighbors the kind of Colonel I was—not a real one in the European sense, but, as we would say in Am., a geographical one. (会議の晩餐会では食事の時間中ずーと、私がどういう種類の colonel であるかをテーブルで隣り合わせた人々に説明せざるを得なかった——colonel という私の肩書は、ヨーロッパでいう軍の大佐の意味ではなくて、アメリカで誰もが認めている地理的な種類の幹部 (geographical kind of colonel) であるということ。) My explanation finally reached Falkenhayn’s consciousness, but my neighbor from Saxony was hopelessly befuddled and continued until the last to discuss army technique’ (Intimate Papers of Col. House, i. 260). (私の説明は最後に Falkenhayn の理解するところとなったが、Saxony から来ていた隣席者はそれをどうしても理解できず、会の終る迄、私の苦手とする戦術論 (army technique) の相手をするよう、絶望的なまでに私をまごつかせた (Col. House の私的記事, 1 の p. 260)

続いては、Stevens も指摘しているように、国会議員や裁判官が任期切れ後も使用している肩書の ‘Honorable’ (閣下・先生) の少しばかりおどけた拡大使用の現実について述べてみよう。

英国ではこの ‘Honorable’ という敬称はその使用に一定の制限が付いていて、伯爵以下の貴族の子・女官・高等法院判事・下院議長・インドと自治領の立法評議会議員に対して用いるが、アメリカでは使用範囲はもっ

と広く、国会議員・州議員・知事・市長・判事の他に、相手が政治家・政府官吏であるならば高級下級の別なく、自分が敬意を払いたいと思う場合には遠慮なしに 'Honorable' の称号を奉る。この辺の事情を知るに適当な次のような記事がある。それは W. G. McAdoo という名のアメリカ人が彼の自叙伝の中の 1 節である。彼は 21 才の時民主党全国大会にテネシー州の代表者の 1 人に選ばれたが当時ほんの淋しい田舎で人も知らないような細々とした弁護士渡世をしていたに過ぎなかった。彼の自叙したものはこうである。'The secretary made out a card of credentials in the name of the "Honorable" W. G. McAdoo. I certainly felt very important' (Crowded Years, 38). (「州長官は 'Honorably' W. G. McAdoo という具合に私の名を書いて、大会主催者への私の信任状を書いて私に渡してくれた。私は非常に重要な人物だと、とても強く感じた」(「多事な年」という項の 38 頁)。

これら Colonel や Honorable などの敬称肩書の尊重に関して言えば、ヨーロッパ人や、ラテンアメリカ人の行っている風習に比べると、英語を話す合衆国人の敬称使用は、むしろ過剰適用であると言える。最も、ヨーロッパでも特に英国の場合には、やはり尊称使用過剰の馬鹿気た時期も一時的にはあった。例えば 'Esquire' ⁽²⁷⁾ (〔英〕殿・様) という敬称の 1953 年の秋の熱狂的使用は人の記憶にいまだ新しい筈である。建国の歴史が古く、国王・貴族・僧侶などと、一般庶民との間の区別が大巾で、同じ貴族 (nobility) の中でも、Duke (公爵), Marquis (〔má:kwis〕 侯爵), Earl (〔ə:l〕 伯爵), Viscount (〔vái-kàunt〕 子爵), Baron (男爵) の 5 段階に亘る位階の区別があり、Baron の下に、Baronet (従男爵), そのまた下に Knight (騎士) があり、それぞれ領地を与えられて豪勢な生活をしていたし、Knight の下位に当る Esquire でも、その土地の大地主として威勢を振っていた。このような歴史的国柄の中で育った英国人が、時に手紙の名宛人に Esquire を敬称として奉ったのも不思議ではない。

不思議なのはアメリカである。アメリカは社会革命というよりは、寧ろ政治革命の結果生れ出た国柄であるということを思い出すことができる。

元来社会革命というものは、小細工的な名目上だけの (titular・肩書上の) 名誉・貴顕を廃棄しようとする高度に意識的な努力によってなされるものである。フランス革命 (French Revolution (1789—1799)) によって Citizen⁽²⁸⁾ (市民・公民) という語が用いられるに至ったこと、またロシア革命 (Russian Revolution⁽²⁹⁾ (1917年3月と11月の革命)) 後における Comrade⁽³⁰⁾ ([kómrid] 同志・仲間) という語を眺めて見よ。このようなことはアメリカでは起らなかった。アメリカでは、もともと排除すべき貴族 (nobility) というものも無かったし、罷免すべき官僚 (governing officials) というものもいなかった。もし排除すべきものの存在が必要であったとするならば、そのような役所も貴顕な地位も初めから存在しなかったので、先づそれらを作ってかからねばならなかった。そして国の役所の行政長官 (chief executive) に与えるべき肩書をどのようにすべきかは、当分のところはまだ論議を尽してから決めればよい問題であった。

アメリカ人の行ってきた 'Honorable' という肩書の過剰適用に関しては、H. L. Mencken が既に事鮮かに、かつ、興味ある述べ方で、痛烈の論説を掲げているので、詳細に亘る論議をここでは差控えるが、ただ次の点だけは指摘するに値するであろう。即ち、一方においてアメリカの国土の広大さに起因して起る 'Honorable' に値すると見做してよいであろう人間の数の増大の問題と、他方においてアメリカの政治機構の複雑さに起因する 'Honorable' の位階の問題である。

手始めに、大統領 (President) と、彼の内閣 (cabinet) の閣僚 (members) と、最高裁判所 (Supreme Court) の判事 (judges) とがある。これらの職務の総ての人物が Honorable の肩書に値していることを疑がう者はない。しかしながら、もし行政府 (executive branch) と司法府 (judicial branch) とが、このようにして、貴顕たるの資格を賦与せられ、そしてその限りにおいて、国民一般が心の中に意識しないうちに、貴顕たるの資格を30名に充たない個人に与えてしまっているとすれば、アメリカの政治の三権分立の平等 (equality of all three branches

of government) の概念そのものは、上院 (the Senate) と下院 (the House of Representatives) の総ての議員 (members) にも差別なくその資格を与えないではおかないだろう。事実アメリカでは Honorable⁽³¹⁾ の称号の適用を規定する公式の規則はない。とすると、今度はおよそ 550 名の Honorables を一挙に加えることになる。話しを行政府と司法府だけのことに戻してみても、大統領と彼の内閣の閣僚 (the President and members of his Cabinet) と最高裁判所判事 (Supreme Court Justices) までで、Honorables の適用を停止してよいかどうかの問題が起る。政務〔事務〕次官 (undersecretaries) や、次官補 (assistant-secretaries) は勿論のこと、控訴院判事 (appellate [əpélit] judges) や、地方裁判所判事 (district judges) は肩書なしで放っておいてよいであろうか。更に外交関係行務の全使節団 (diplomatic corps) や政府の出先特別機関 (special governmental agencies [kɔ:z]) の役人を放っておいてよいであろうか。

連邦政府の全米的政治機関についての Honorable 適用の問題は、ここで暫らく措いて、今度は 1 段階下位の水準で同じ問題を探ってみると、既に Honorable の肩書を与えてしまった計算になっている 2000 名の Honorables を、ここでは、49 倍に増加せねばならないことになる。いやその程度での適用停止も不可能になってくる。というのは、州の首都の市長は何れもアメリカでの小さい方のいくつかの州知事に匹敵する威厳と責任のある地位を持つことは疑問の余地はないからである。結局のところ最終の段階では、州 (county) 内の郡区 (township) の地方裁判所判事や、村の警察〔消防〕署長 (village fire marshal) まで適用を及ぼさざるを得ないであろう。更にこれらの職務の多くは、その任期が、やっと 2 年 (a biennium [bai-énjəm]) であり、そして、ひと度その肩書を取った人間は、もうそれを手放しそうもない。分らないことは、そのような、ひとかどの人物は、その肩書を放棄するかどうかであり、また Honorable という肩書の中に、その位置の顕要度の高さ低さと部類別 (degrees and classification of honorability) とを、どうして、も

っと早く付けなかったかである。

現実のこととして、アメリカでは Honorable (イギリスにおいてと同じように Hon. と略して用いる) という用語は、適用に関して公式規程がないことに乗じて、上に述べたような部族の総ての人物に適用使用されている。このように用語の適用を無差別に拡大し、人物を壮麗化しようとした風潮のために却って内容の区別が付かなくなり不便を感じたために、他方では鑄造された新語の適用範囲内の人・物・事などに部類別を加えようとする試みもなされた。例えばアメリカに独特に発展した用語群で fraternal orders (「友愛団体」) というものがあつた。それは Honorable という用語と同じ社会的用語ではあつたが、その適用範囲の扇形図 (sector) は更に大きく、もっと雑多なものを含んでいる。殊に19世紀の後尾の20年間は、これらの友愛団体の命名に用いた信じ得ない程数多くの用語 (実際には500語にも及ぶ) を生み出した。この点に関して Schlesinger and Fox の 'History of American Life' (前出) はこの種のものの内部分類の必要性を示している。彼等は the American Order of Druids⁽⁵²⁾ (「デュールーズアメリカ教団」), the Prudent Patricians⁽⁵³⁾ of Pompeii (「ポンペイの用心深い貴族」), あるいは the Concatenated Order of Hoo-Hoo (「フーフー連鎖教団」) というような、飛び切りに珍しい用語を含む賑やかな名前を持つ各種の教団の呼称について解説を与えようとしたくだりで、全く健全な観察眼を働かして、「友愛主義の行っている分類明示的命名法 (nomenclature of fraternism) は、何時かは欲求不満の学生や希望的解釈をしたがる学生達にとって興味ある資料となるであろう。」と述べているが、それはとりも直さず彼等自ら先頭に立って、行き過ぎた用語適用の結果から生じた混乱を整理するために、扇形図内の社会集団を部類分けしようとい図したことにより重大な意義を認めることができるであろう。

Ⅱ. 婉曲語法 (Euphemism) の隆盛

アメリカ英語の持つ特色の一つを、今まで述べてきた「平凡事の壮麗化」(Glorification of Commonplace) であるとすれば、それに優らずとも劣らない、もう一つの特色として、婉曲語法 (Euphemism) の盛んな流行を挙げないわけにはいかない。人に向かって話しかける際に、相手の心に不快感を起させる懸念のある (offensive) 用語を避けて、その代りに、柔らかく響く間接的な意味を持つ用語または句 (less direct word or phrase) を用いて話す話し方を「婉曲語法」というが、それは例えば「死亡する」('die') という意味に、'pass away' (「この世を去る」) という用語を用いる如きがそれである。

1) 婉曲語法隆盛の第一原因

一婦人の社会的地位の高いことと、婦人の言語
使用上の慎しみ一

アメリカ英語において婉曲語法隆盛の第1の原因となったものは、アメリカ社会における婦人の地位 (position of women) の高いことであり、それはアメリカ的文化が圧倒的に (predominantly) 中産階級 (middle class) 的性格を持ったものであったという事実に基いていた。

現代社会 (modern society) の歴史の展開の過程を眺めてみると、「礼節」(proprieties [prəpraiətiz]) というものに対して、気を使ったり、大きな関心を持ったのは、いつの時代でも中産階級の人間であった。それに較べて下層階級 (lower class) の人間は礼節に関心を持つ余裕が無く、他方上流社会の人士 (upper class) は、自己確信 (self-assurance) という厚ぼったい衣で保護されて不安感を持たず、礼節に無関心で、やりっぱなしな態度で暮してきた。このような社会の情勢下で展開したいくつかの礼節のうちで、言語使用上の礼節 (linguistic propriety) が通常著しい地位を獲得していた。18世紀の英国の経験した事態を眺めて見てもこのことが言える。当時英国で「言語の過剰学習」(excessive

schoolmastering of the language) を必要としたのは、英国の中産階級の人間、殊に中産階級でも上部に属する人間どもであった。アメリカ東北部の New England 地方に入植した清教徒達 (Puritan settlers) は、彼等もまた中産階級の人間であって、言語使用上の礼節に鋭い関心を持っていたということは、「神への不敬」(profanity [prəˈfæni]) を禁止する植民地法律の数の多いことを見れば分る。Noah Webster (1758—1843) 米国の辞書編纂家は聖書 (the Bible) から不穏当な個所を削り去ること (expurgating) に意を用い、その仕事を自分の重要な任務の一つと考えていた。また当時世に出ていた社会学研究に関する論文も数多くあったが、それらの論文が記載している内容も、今日のアメリカ人もそうであるように、当時人間も自分達の社会的地位を中産階級に属する部族であると考えていたことを示している。従って彼等は多数の (a multitude of) 「言語的禁句」(taboo) を作り、それによって典型的な中産階級の上品さ (delicacy) というものを示そうとしたということは極めて自然なことであって、それ故にアメリカ英語はこの上品さという重い荷物を担った、いわゆる、婉曲語法的用語に満ち満ちた言語であると言える。その上、このような「用語上の上品さ」(verbal delicacy) は、アメリカの辺境社会の婦人達が属していた中産階級という地位の面目にかけて、益々高められることとなった。次に掲げた記録は Harvey Wish の著した 'Society and Thought in Early America' (『アメリカ建国の初期における社会と思想』) の中からの引用記事であるが、辺境婦人のこの辺の事情を明らかに、かつ、十分に示している。

... their relative scarcity and economic opportunities made them more difficult to please in courtship. (... 婦人の数が男子の数に比較して少かったということと、彼女達が経済的好機会に恵まれていたということから、婦人は求婚されても、さっぱり喜ばなかった。) While the South enjoyed a latter-day chivalry with roots deep in feudal times, the North, too, had its ritual of courtesies due to women. (南部の婦人は中世の封建時代から深く根ざしていた男性の婦人に対する騎士道精神 (chivalry⁽³⁴⁾ [ʃiˈvəlri]) の近代版を享受していたのに、北部の婦人もまた、婦人に対し文句なしに男が払うべき礼節を慣行として享受していた。) Everywhere seduction and breach of promise suits⁽³⁵⁾ were

apt to be prejudiced in the woman's favor. (北部のどこへ行っても婦女子誘拐事件や(娘を)嫁にやるという約束が済んでいる婚約の破棄は、婦人に都合のよいように偏見を以て処理された。) Here one addressed a mixed audience as 'Ladies and Gentlemen' instead of the traditional 'Gentlemen and Ladies'.

(ここでは、人は、男女混合の聴衆に対しては、昔から慣例の「紳士淑女の皆さん」ではなくて、「淑女紳士の皆さん」と呼び掛けた。) Women travelled alone without losing caste⁽³⁶⁾, and their daughters dispensed with chaperones⁽³⁷⁾

(even if they belonged to the well-to-do class). (婦人は社会的特権的地位を失うことなしに、単身で旅行もしたし、彼等の娘達は《たとえ上流社会の家庭の生れであっても》、付添人なしで社交界に出ることもできた。) While the Industrial Revolution⁽³⁸⁾ was emancipating western European women as well as their American sisters, the American woman was definitely ahead in status.

(産業革命《18世紀末—19世紀初頭》が、アメリカの姉妹達を含めて、ヨーロッパの婦人達を解放しつつあった間に、アメリカの婦人はその身分地位の点において、決定的にヨーロッパの婦人をその後に引離してしまった。)

アメリカの婦人は、このような稀少価値 (scarcity value) のために、人目を引き、言葉使いの問題でも、極度に細かな気を使う役目を持つ地位に就いたように思える。Calhoun は彼の書いたアメリカの家庭の研究記事の中で、1850年より数年前に書かれた1通の手紙の文句の一部を引証している。その文句というのは次のように言い切っている。 'Women can alter the dialect, change the manners, dictate the dress and habits of life, and control the morals of every community'. (「婦人は方言を変え、作法を改め、身に纏う衣裳や生活習慣を指令し、どの社会でも自分の所属する社会の倫理的規準を制詭することができる。」) Frederick Marryatt⁽³⁹⁾ 隊長 (《1792—1848》英国の小説家・海軍大佐) はこの点に関して解説を与える際に、「用語の上品さ」の点で第一流の模範例 (classic example) として屢々考えられている「脚」という用語を掲げている。彼は先づ最初に、あるアメリカ婦人の前で、話題を婦人が禁句として用いることを慎んでいた「脚」 (Limbs [limz]) のことに触れたために、彼女の激しい怒りに触れたと述べ、次いで彼女の学んでいた女子神学校 (the girls' seminary) の話しに及んでいる。その学校ではピアノの 'limbs' (脚部) の床に接している部分に、ひだ飾りの着いてい

る上品な小さなズボンが穿かせてあった ('dressed in modest little trousers with frills at the bottom of them') と付け加えている。この後部の話しが真実のものかどうかについて質問が出たかどうかは重要なことではない。この物語の意図するものは、アメリカ人の生活様式の一部で特に婦人の気立てを示そうとしたところにあると言える。また用語上の至高の洗練 (supper-refinement) に対するこのような情熱 (cult) は、とはいえ、短命なものではなかった。リンド夫妻はその 'Middletown in Transition' (前出) の中で、時代も降った1891年に、ある地方的な high school ⁽⁴⁰⁾ (高等学校) で学生に提示された卒業式の式辞の標題が、'Woman is Most Perfect When Most Womanly' (「婦人は最も女性的である時に最も完全である」) となっていたと述べており、同時にその内容を示す essay (論文) を引用している。このことから、アメリカ婦人の用語上の洗練に対する情熱の強さと、その情熱が辺境時代以来長期に亘って特に婦人の教養とさえなっていることを知ることができる。

a) 性に関する婉曲用語

女性優先 (female dominance) と、中流階級人士の倫理的道德的素養が、用語使用上に最も明瞭に表れたのは、直接的にせよ間接的にせよ、性 (sex) に結び付いた事柄については、極度な慎しみを保持して、口に出さない (extreme reticence) ことであった。ここでもまたリンド夫妻の 'Middletown in Transition' は、つい最近20年ばかり前の1集団社会の人々の用語から、追証となる価値のある実例を提供している。

Sex is one of the things Middletown has long been taught to fear. (性に関する事柄はミッドルタウンの人々が、慎しんで言わないようにすることを長期に亘って教えられてきたものの一つである。) Its institutions—with the important exception of the movies and some of the periodicals it reads, both imported from the outside culture—operate to keep the subject out of sight and out of mind as much as possible. (ミッドルタウンの町のいろいろな公共機関 (学校・病院・団体など) は、輸入映画と町の人々が読む輸入定期刊行物の若干を除くという重要な例外はあるが、性に関する事柄をできるだけ市民の目から遠ざけ、頭から忘れさせるようなやり方で活動した。)

教養を重んずる人士とまではいかない一般大衆の用語に関しても、新しく鑄造された上品な用語を用いたり、あるいは衝撃性の薄い(less shocking) 用語を発展させることによって、勿論強制的ではないけれども本腰になって、禁句的性格の用語 (taboo characteristic) を追放しようとし、性に関係あるいかがわしい話題や材料を人々の視野と思考の領域から遮断している。アメリカ英語に限らず何処の国の言語でも、こういうことはやっではいるが、特別の注意を喚起するに値することは、アメリカ英語の中にこの種の事柄に婉曲語法使用の風潮が、どのような姿でまたどのように強く発展したかの問題である。従ってここで、この問題の姿を究明することは意義があると思われる。

性の問題に関しての用語の慎しみが、逆に「用語の上品さ」となって表れ出た出口の一つは、売春宿 (houses of prostitution) ⁽⁴¹⁾ を指すのに用いる非常に多数の用語である。これらの用語にも勿論のこと、その隠し立ての程度に濃淡の差があるのは止むを得ない。例えば assignation house ⁽⁴²⁾ (あいびき宿) という語は、1854年に表れたものとして the Dictionary of Americanisms に引用されており、また house of assignation という語は、それより20年だけ先立って用いられた。Sporting house という用語は、イギリスでは最初、単に運動選手がよく集る家 (a house haunted by sportsmen) を意味し、後には賭ばく宿 (Gambling house) を指したが、最後には1894年に至って、'If Christ Came to Chicago' (『もしキリストがシカゴに来給えば』) というような聞いて阿然とする名を持ったある本の中で、Sporting house をアメリカで売春宿 (brothel ⁽⁴³⁾ [brɔ:θl, brɔ:θl]) を指す用語として用いている。実際には sport という用語を、アメリカで売春婦 (a prostitute) と関係付けて用いる用い方は一般に行なわれていたが、1894年当時に売春婦を指すのに用いたという記録はどの辞書にも載っていないようである。crib ([krib] 四方に棚の付いたベビーベッド、狭い部屋) という語も初めは gaming house (=gambling house ばくち打ちの宿) を指し、sport という語と同じ推移を辿って後に売春宿を指すに至った。

もっともこの語は *Sporting house* より少し早い時期に用いられた語ではある。この他 *cat house*, ⁽⁴⁴⁾ *fancy house* ⁽⁴⁵⁾ (〔*fancy woman* (女郎)〕の家), *cow bay* ⁽⁴⁶⁾ (〔雌牛の灌注器〕), それに *call house* (〔前以て電話で約束してから訪れる家〕) 等の用語は, その時代その時代に売春宿を指すのに用いられた。そしてまた少し高級な (*dignified*) 宿の場合には, *disorderly house* とか, *house of ill fame* (不名誉な家) のように言った。売春斡旋人 (*procurer* (〔米〕〔*proukjú:rə*〕) を指す婉曲語としての *Cadet* (〔*kədét*〕士官候補生) は20世紀初頭から約30年間人気を博したようである。同様に禁句として命名することを慎しんだものに, 特定のいくつかの性病 (*specific venereal* [viníəriəl] diseases) があるが, しかし病名を呼ぶことについての慎しみは最近20年間の時期に入ってからには一般的に言えば弱まっている。

b) 「洗面所」に関する婉曲用語

婉曲語法を特別に強く用いたもう一つの領域は, イギリス人が *water closet* (便所) と呼び, アメリカ人が *toilet* (〔米〕洗面所・浴室) と呼んでいるところのものである。*toilet* という語の用法を説明して, 英国出版の最大英語辞典である *Oxford English Dictionary* は, 「合衆国では入浴施設を備えた化粧室 (*dressing room*), また, 狭義では, 浴室 (*bathroom*), 洗面室 (*lavatory*)」を指すと記載している。が, しかし *toilet* という用語がどの時期から正確に便所 (*water closet*) そのものを指し始めたものかを決めることはむづかしい。*toilet* という語を使ってあって, 便所を指しているに違いないと思われる最初の用例が記録に載ったのは1909年である。勿論 *toilet* という語が便所の意味を持ったのはそれよりかなり早い時期においてであったことは間違いない。*rest room* (公共建物の中にある便所・洗面器などの付いている部屋) (1909) や, *comfort station* (= *comfort station room* 公衆便所) (1904) などの婉曲語もまた20世紀の最初の10年間の時期に混成鑄造された言い方である。そして *Mencken* (前出) は, 彼の '*The American Language*'

《1919—27》の中で, powder room⁽⁴⁷⁾ (《特に婦人の》手洗室・便所) という混成語は禁酒法適用期間 (Prohibition⁽⁴⁸⁾ era (1920—1933)) 中に存在した「もぐり酒場」(speakeasies (speak+easy; こっそり注文することから)) というものの存在が生んだ用語であるとしている。同じく「婦人用便所」を指す washroom のアメリカ的用法は1853年から既に始まっていた。

c) 身体の部分に関する婉曲用語

用語上の極度の上品さの重んぜられた時期においては, 身体のいろいろな部分に対して禁句というものがあるであろうことは容易に想像できる。性 (sex) とか排泄機能 (excretive [iks'kri:tiv] functions) とかに, いくらかでも関係のある身体の部分に対しては殊にそうであるであろう。19世紀中期のアメリカも例外ではなかった。とはいえこの話題については Mencken と Pyles とが既に詳しく解説しているので, ここでは彼等が見落したらしい1つ2つの事項を指摘するだけで足りるであろう。

例えば先に掲げた Marryatt 隊長の口から出た 'Limb' (「脚」) という用語を聞いて, かつとなって怒ったというアメリカ婦人についての屢々引用される物語りが, 別にあることはあるけれども, 'leg' (「脚」) という用語を禁句として追放し, その代りに 'Limb' を使用したのはアメリカでも十分な婉曲語として認められていたのである。実をいえば 'limb' というこの用語は, 1400年という早い時代にイギリスにおいて leg という意味を獲得していた。Oxford English Dictionary の引用諸例は, この意味で limb という用語が15世紀の初めから1837年に至るまで, イギリスにおいては絶えず使用されていたことを示している。Marryatt 大佐のアメリカでの経験の記事は1839年の日付がついており, またその年から1924年までの limb の総ての記載事例はアメリカ的用法のものである。従ってここに問題にしている leg という用語を避けて婉曲語法として limb を使用するやり方はアメリカ生れの婉曲語法というよりは, イギリス生れの婉曲語法を受け継いだものだと言える。

話しを進めよう。屢々言われることであるが、leg を忌み言葉として用いない婉曲語法は食卓に出る鳥肉にも及んでいった。食卓用婉曲語の一つである drumstick (《料理》鶏の足《太鼓のばちに似ているところから》) は、その発生は明らかにイギリス英語であって、辞典に記載されている引用の例証の段階では少くとも合衆国で用いられているのと殆んど同程度にイギリスでも用いられていた。婉曲語としての ‘joint’ (《解》関節の意から、(〔英〕《肉屋で切り割ける》大肉片〔数日間の料理用として買う骨付肉〕・輪切り肉) という語が、牛肉・羊肉と鹿肉のような獣肉に関連して用いるイギリス人的用法から、更に適用範囲を拡大して、鳥の焼肉 (roast fowl) にまで及ぼした用法は、明らかにアメリカ生れのものであったようであり、また a first joint (鶏の脛《すね》肉) と a second joint (鶏の腿《もも》肉) というような更に細かい区別をした ‘joint’ という語の用法もアメリカ生れのもののようである。あるイギリス人がアメリカを旅行中、1845年公的な晩餐会の食卓で同席の一婦人から第1 joint と第2 joint を呉れと言れた (‘requested by a lady, at a public dinner table, to furnish her with the first and second joint’) と記している。‘leg’ という語が下品な taboo (忌み言葉) と思われているところから、この語と同程度に禁句とされている breast (〔brest〕胸《人体の肩から腹までの部分》、または女性の乳ぶさ) という語とが禁句として一對の語となり、それに対して別の一對の婉曲用語をアメリカの食卓用に生み出した。Thomas C. Grattan (前出) は彼の ‘Civilized America’ (1859, 「文明化したアメリカ」) という著作の中で、『総ての淑女と紳士は「鶏の足付肉」(legs of poultry を “dark meat” (「赤肉」《鳥の足肉は煮ても白くならないところから》) と呼び、それと区別して「鶏の胸・翼の肉」(breast of poultry) を “white meat” (「白肉」) と呼んだ』と説明している。もっともこの “white meat” という用語は1個の術語として、それより前に、既にイギリスで行われていたが、イギリスでは鶏の胸肉は指さず、単に牛乳・チーズ・それに他の酪乳製品のような文字通り白色の食品のみを指して用いられていたに過ぎなかった。

d) 衣服に関する婉曲用語

同様に、男および女の着用する下着類 (under-garments) は、19世紀中期の婉曲語鑄造の発明の才に満ちたアメリカ人に肥沃な栽培農場を提供した。‘Unmentionables’ (「名前を呼べないもの」) という婉曲語は、ある時にはズボン (trousers) を指し、ある時にはズロース (drawers) を指して用いられ、その用例は、1839年という早い時期に既に記録に載っていた。また ‘sub-trousers’ (「副ズボン」) という用語は、やっと1890年になって始めて記録に載った語であった。これ等2つの年代の約50年の間に様々な用語が表われた。因みに “inexpressibles” (「言い表わせないもの」) という婉曲用語は、時には、アメリカ起源の他の婉曲語と同類のものだとされることもあるが、実際にはイギリス起源のものであって、19世紀を通じてイギリスですーっと使用されていたということも注意しておかねばならない。

2) 婉曲語法隆盛の第二の原因

—不快感を伴う用語の忌避—

a) 死・埋葬に関する婉曲用語

アメリカ英語における婉曲語法の隆盛の第2の原因は、話し相手に不快な感じを起させたくないという希望と配慮とが人の心にあって、それを言語を通じて相手に伝えようとするところにある。本稿 Euphemism の頭初に掲げた ‘die’ を用いず ‘pass away’ を代用するのもその一例にしか過ぎないが、元来 death (死), dying (頻死の) や burial (埋葬) などの部類に属するものは、アメリカ英語に限らずどこの国の言語でも、それ等に代るもう一つの「特別語彙」(lexicon) の部族用語を作って、その中に非常に多数の婉曲語群を発展させている。Louise Pound (1872—1958) (アメリカの言語学者) はアメリカ英語のこの領域における問題を取扱い、最も広く最も深い研究を行っている。「死」に関してアメリカで発展した

いろいろな婉曲語のうちで今日最もよく知られ、かつ最も広く行われている語としては ‘coffin’ (棺) の代りの ‘casket’ (宝石小箱) があることは既に述べた。この ‘casket’ という用語は ‘burial casket’ (埋葬用の小箱) という合成語の形を採ってアメリカ英語に入ってきたように思える。この ‘burial casket’ は ‘burial case’ (埋葬箱) という合成語と一緒にあって、19世紀の50年代、または60年代に鑄造されたものであるが、この ‘casket’ は婉曲語として極めて迅速に人気を博するに至った。このことはその後僅か10年経つか経たない1870年以前において既に、New York 駐在のあるイギリスのニュース通信員が、‘In America a coffin is called a casket’ (アメリカでは棺(ひつぎ)は宝石箱と呼ばれている。)ときっぱり言い切った報道を故国に向けて送ることができたということからでも分る。とは言え ‘casket’ というこの用語もその用語法誕生の直後から、いきなり人⁽⁴⁹⁾ 気の中心に立ったというわけではなかった。Nathaniel Hawthorne ((1804—64) 米国の小説家) は彼の ‘Our Old Home’ (「なつかしの故国」) (1863) の中で解説して、‘Caskets!—a vile modern phrase which compels a person. . .to shrink. . .from the idea of being buried at all’. (Caskets [宝石箱] だって、／＼いやな当節の新語だなあ！ この言葉を聞くと、どうしても土に埋められるという感じが心に襲ってきて逃げ出したくなるよ。) と述べている。

今日の葬儀屋 (mortician) が、死体に香水を振りかけて営む葬儀の礼式 (perfumed practices) は勿論のこと、非常に多数の回避的 (evasive) 文句を生み出した。それ等の臆病な表現文句に飽き足らず叡知の皮肉を鋭い口調で浴びせたのは英国の小説家・批評家 Evelyn Waugh⁽⁵⁰⁾ (Evelyn waugh) 《1903—1966》) で、彼の書いた ‘The Loved One’ (「愛する人」) がそれを示している。

b) 「神の冒瀆」に関する婉曲用語

神を冒瀆する言行 (profanity) を禁止しようとする清教徒 (Puritans) の運動については既に述べたが、そのような教会が主唱した運動にも拘ら

ず、その禁止規則の侵犯の事例が非常に多かったことは、一方においてその規則の遵守よりも寧ろ侵犯の事例の方が却って人々の受けが良かったということを示している。とはいっても、他方においては、それらの規則がいろいろな著作の中に記録せられた期間の続いた限りは、その規則は人々の心に有効にその効力を及ぼしていたし、清教徒が良心的に禁句として扱った冒瀆用語は、有効禁句 (active taboo) として人々の口から出ることを憚ったということをも、また十分に示している。教会に率いられた清教徒のこの禁句使用抑圧運動の結果として、アメリカ英語は、'by God!' ('神かけて、必ず') 'for God's sake' ('後生だから'), 'Jesus Christ' ('畜生!') 'とんでもない!'), 'Damn!', ('畜生!') のような神に対する不敬な罰 (ばち) 当り文句 (swearing) を禁句として追放して、God という発語を外して、同じ驚き・怒り・呪いの発声語として '(Good) Gracious!' ('おや!') 'まあ!') や 'darn' ('とんでもない'), 'drat!' ('いまいましい!'), 'doggone' [dɒg-gɒn] ('ちえ!'), 'blasted' ('のろわれた', 'ひどい'), 'Drat you!' ('うるさいね!') 'しばしは女が用いる'), 'Sam Hill' (地獄 [hell]), 'gee' ([dʒi:] 'ちえっ!') '驚いた!'), 'Gee whiz!' ('驚き, 喜び') 'おやまあ!') '<Jesus') などのような代用婉曲用語 (near-swearing 罰当り的な不敬語ではないがそれに近い用語) の 1 集団を発展させた。そしてまた神の名を用いないこの 1 集団の婉曲語から生れた 60~70 語に達するであろう子孫語 (progeny) もあることは確かである。そしてそれ等が婉曲語として代用している元の禁句の発声に似た発音を大なり小なり依然として保持したままである。

神の名を使った God! や Jesus Christ! など是不敬に当る禁句 (taboo) であるとしてその使用を教会から禁止されたので、darn! や gee! などを婉曲用語として驚き・軽蔑などの感嘆詞として用いるに至った経過を、ここで暫らく眺めてみよう。

'darn' ('ちえっ!') はこの種の語の発展の生い立ちの姿をよく示している。何年か前に中世紀英語の 'secret' (秘密の) 代りをした 'derne' という語が 'darn' の本当の原語 (progenitor) であるという説が行われた

り、これとは別に ‘darn’ という語は、イギリス英語 (British) の ‘clerk’ (番頭) の中の er [ɑ:] と同じ音声を持つ er [ɑ:] を添えてできた ‘eternal’ ([itɑ:nəl]) という語の失語症形体 (aphetic form) から発出した (emanated) ものだという説もあったが、そういう議論はここでは暫らく保留しておいてよいであろう。知らねばならないことは、1798年に既に形容詞 (adjective) として用いられた ‘darnation’ (「いまいましい」) という語が、ちゃんとできており、その後25年経ってから感嘆詞 (interjection) として用いられたということである。‘darnation’ が用いられた最も初期の実例を調べてみると、この語はアメリカ北部 New England の海岸の住民によって使用され、またその住民について軽蔑的に用いられたことが分る。もし ‘darnation’ という語の最初の使用の1798年以前において、後母音の (post-vocalic) r 音が弱音化してしまっていたか、または、完全に消失してしまっていたかのいずれかであると想定し、そして New England 海岸地方住民の発音である r 音の前の a 音が今日のボストン市民的英語の ‘park’ ([pɑ:k]) の持つ音の類似音を伴った低位中央部母音 (a low central vowel) であったと想定するならば、darnation の音が damnation の音と極めてよく似ていたことは明らかである。darnation と damnation とは中央部の m を除いては実質的には同じものである。アメリカ英語の ‘darnation’ が感嘆詞として用いられ、‘damnation’ (「ちえっ／＼」) と同じ軽蔑などを表わすに至った発展の道筋を辿ってみたわけである。他方、‘darn’ はこの ‘darnation’ とは別語であって、‘darnation’ より10年位後れて独自の起源を持って発生した語である。この辺の事情に関して、当時において非常に抜目のない正確な用語分析研究が1832年に J. T. Buckingham によってなされ、New England magazine (「ニューイングランド誌」) に載せられている。彼は、‘We have “Gaul darn you” for “G—d—you”. . . and other like creations of the union of wrath and principle’. (我々ニュー・イングランド人は、神を冒瀆する ‘G—d—you’ (「くたばれ／＼」) という禁句を避ける婉曲語の ‘Gaul darn you’ (「くたばれ」) という文句を使ってお

り、そしてまた、その他にも、怒り (wrath) と禁句の原理とを程よく結合させて鑄造した新しい軽蔑・驚きを表わす婉曲文句を所有している。)と述べている。

婉曲な言い廻し (Euphemism) がアメリカ英語の特色の一つをなし、その原因の一つが人に対して不快な念を与えまいとする配慮から日常生活においても 'casket' その他を用いたり、神を名ざす 'God' のような用語を避けて 'darn' その他を代用したような、18~19世紀のアメリカ英語の姿を眺めてきたが、このようなアメリカ英語の風潮は単に過ぎ去った世紀だけに起った事象ではない。それは20世紀の現代においても、また、以前よりも、もっと現実的な社会的事象の中に広く起っている。

c) 学校教育に関する婉曲用語

20世紀の今日において、我々の極めて手近に行われている Euphemism の一つの現象はと言えば、学校教育の領域に属するものである。人生のきびしい事実 (harsh facts) を少しでも和らげようとする努力が、婉曲語法の姿をとって、アメリカ社会を明るくするのに役立っているのに気付く。それは今日のアメリカの学校教育に関して、慣例として行われているいろいろな事象である。一つにはアメリカの小学校・中等学校教育が事実上青少年人口の総てに普及しているという現実と、二つには蓄の時代の学童期あるいは生徒時代の少年少女の持って生れた性格 (personalities) の発展を阻害しないようにしようとする教育心理学者達の主張とが原動力となって、そのような基礎的段階の学校では、一方には従来の慣習 (practice) となっていた児童生徒を落第させて (failing), 同一学年や同一単位の履習を繰返させるという様式を、そうすることが専門的な眺め方からすればどんなに不適當な取扱い方に見えようとも、殆んど完全にアメリカ教育は取り止めてしまっているし、他方においては、非常に高度な専門的授業内容を課するという昔の教育慣習を弛めたり、また平易な内容のものに既に手直ししてある専門的授業内容 (watered-down academic regimen) さえ十分に消化できない生徒達のためには、特別に設けた多数

の「特別課程」(special courses)を設置するに至っている。このような教育上の現実から更に生れ出てきたもう一つの教育慣習はと言えば、大学の段階でも、一般教養科目の不合格者 (academic failures) を進級させるという慣例である。それはアメリカのある地方において、「社会的進級」(social promotion) として知られているところのものである。また中等学校の場合でも、上級中学校の教科課程 (highschool curricula) の基盤で、今日では「社会英語」('Social English') や、「社会数学」('Social Mathematics') というような奇妙な名称 (labels) を持ったいくつかの講座が開設されている。更に通常の知性 (normal intelligence) を持たない劣った生徒を指すのに劣等生 (less intelligence) などの言い方をしないで「例外児」('exceptional' child) という呼び方をするのも婉曲用語使用の現実の一例にしか過ぎない。

忌み言葉 (taboos) の発生と、それによって起る婉曲用語 (the resulting euphemisms) の使用とは、どこの国の言語の場合にも、また何時の時代にも起っているということは何人も事実として認めざるを得ない。イギリス英語も例外ではなかった。紀元5世紀に英国に移住したアングロサクソン人の宣教師で、一方において用語上の礼節 (propriety) に過剰敏感とも言える程の感覚を持ち、他方において当時イギリスの各地の港町の歓楽街に公然と行われていた俗世間的な辱かしい行為を熟知していたために、the Prodigal Son (新約聖書ルカ伝XI) (「放蕩息子」) についての寓話に出てきた 'harlot' (《古》売春婦) という語を英語 (当時の古代英語 (Old English)) に翻訳する際に 'port-cwene' (=port woman, port queen 港の女王) という新しい婉曲用語を鑄造したという事があったが、そのような早い時代から婉曲語法は行われていた。現代に至っても、この風潮は尚お続いており、最近のアメリカ政府所属の行政機関の1部局も、軽度の経済的沈滞 (slight economic depression) を指すのに、その用語に心を使って、単に 'recession' (「休憩」) に過ぎないと性格付けるといような言語的たしなみを示している。19世紀中期のアメリカ英語の持った婉曲語法の発展の興味ある局面はと言えば、一つには経済

的事象にまでこの用語法を拡大するに至らしめたアメリカの文化的諸情況 (cultural circumstances) と、二つには婉曲語法の大名振舞いの的な規模の茫大さ (lavish scale) と、三つには、屢々起ったことではあるが、婉曲語法の極度の行き過ぎ使用 (the extremes) との三つともえの奇妙な結合 ((peculiar combination) の中に見られる状態である。

d) 婉曲語法の隆盛に対するレチスタンス運動

ところが何か一つの大運動が世間に起ると、何時の時代にもそれに逆った反抗運動が起るのは所詮人間のやるものと決っている。婉曲用語を喋って文化人・教養人気取りで気を良くしていたという19世紀の紳士淑女の風習 (genteel tradition) もその例外ではなかった。19世紀のアメリカには、文化的素養と上品さ (culture and refinement) を持たないことを却って公認の事実 (established fact) として受け入れるばかりでなく、寧ろそれを鼻にかけて誇りとし (gloried in), かつそれを誇示したりした (flaunted) 人間達も無いではなかった。「わしは芸なんてものは、ちっとも持ち合せておらんが、わしの好きな道のことだけは、ちゃんと心得ている」式の紋切り型文句 (The 'I don't know anything about art but I know what I like' cliché ([kl̩:ʃéi])) と、それにこのきまり文句が描き出す人間の行動像とは、教養人 (culture) に対する反抗の自他ともに許している実例であり、しかも大文字C (A. B. C. のC. で、学業成績で優・良の下位に位する可) を持った級落すれすれの人間実例でもある。Mark Twain⁽⁵¹⁾ (1835—1910) 米国の作家) の書いた小説の中に、この種の抵抗の多くの実例があり、そのうちのいくつかは、疑いもなく、心底からの抵抗であり、またいくつかは、明らかに、うらはらな心でからかい半分の抵抗ではあった。婉曲用語使用熱に対するこのような反抗態度の極限は、時に 'mucker pose' (《米俗》「粗野な人間の気取った姿勢」) と呼ばれているもので、言語に対するこの種の姿勢は、そこいらの「政治屋」(politician 政治を種にして党利党略を計ったり私腹をこやす人を食った政治ゴロ) 達が、そのような姿勢で臨むことが却って有利だ

と判断した場合に從來採ってきた態度である。言語使用の慣例上から眺めれば、この「粗野人の気取り態度」は亜流英語 (substandard English 標準をはずれた英語) の持ついくつかの長所を意識的に使用した場合に屢々表れる喋り方の態度である。最近に起ったこの粗野人の気取り態度の一つの事例を挙げてみよう。ねっからの文化人で、その上有り余る金を持ち、大統領指名に立候補した人物の例がそれである。彼が政談演説やテレビ対談に出る時には、必ず 'ain't' ⁽⁵²⁾ ([eint]) (ここでは) 方言もしくは無教育者が使う substandard contraction; is not, has not, および have not 等の縮約語) を用いることを忘れない。投票者の属する社会層に自分の地位を下げることによって票を稼ぐためである。ここまできると婉曲語法本来の主旨の冒瀆であるとも言えるであろうが、他方から言えばまたその持つ威力でもあろう。しかし当の本人には気の毒であるが、亜流英語の ain't も最近では相手を説得する言語的道具立て (scene [芝居] 大道具) としての役目も、おおよそ果さなくなっている。

[注]

- (1) trapper ; (ここでは) 毛皮獣を捕えるためにアパラチヤ山系森林深く侵入して行った人間ども。
- (2) lyceum ; the lyceum (ギリシャの Aristotle が哲学を教えたアテネの園) を模してアメリカに起った文化団体の学会活動で、'Bird Magazine' (旧名 Birdlore) を出版したり、今日でも Summer Camp を開いて教師や青年指導者を育成する活動に従事している。
- (3) Constance Rourke ; ~Mayfield アメリカ・オハイオ州生れで児童読物作者：精密な研究、鮮かな筆致、美しい散文体の 作家として有名、1905年 The 'National Association of Audubon Societies' 設立に努力し、野鳥の保護育成のため立法化に貢献した。
- (4) セダン (sedan) ; 人を乗せて、前と後を人が担いで運ぶ屋根付き箱型みこし。
- (5) grogery ; <grog [grɔːʒ] 水を割った火酒・一般に強い酒。
- (6) saloon bar ; 賓客接待用広間の隅を区切って酒を饗するために設けた場所。
- (7) Mencken ; Henry Louis, (1880—1956) 米国 Maryland 州生れ、19才の時ジャーナリストになった。書籍編集家・批評家・随筆家・アメリカ人の慣習・思想等について鋭い批判を加えた文人・'Prejudices' (偏見), 'In Defence of Women' (婦人弁護論), 'The American Language' (アメリカ語), 自叙伝に

- 'The Days of H. L. Mencken' (メンケンの時代) などがある。
- (8) Prohibition ; [米] 禁酒法 《酒類の醸造販売の禁止》(1920—33年の14年間効力を持っていた。)
- (9) Schlesinger ; Arthur Meier ~ オハイオ州生れ, 歴史家・1954年まで Harvard 大学教授。
- (10) Gilbert ; Sir William Schwenck ~, (1836—1911) 英国の喜劇作家。
- (11) Sullivan ; Sir Arthur Seymour ~, (1842—1900) 英国の作曲家, Gilbert と相知り, いわゆる Gilbert and Sullivan operas の作曲を発表した。
- (12) Lynd 夫妻 ; Robert Staughton Lynd, インディアナ州に生れ, 妻の Helen Merrell Lynd と共に 'Middletown', 'Middletown in Transition' (「変貌しゆくミッドルタウン」) を書いた。これらは, Middletown の町の広範な社会学的研究文献である。'Knowledge for What?' (「何のための知識か」) という彼の論文は, アメリカ文化の社会科学研究作品である。
- (13) The Black Crook ; アメリカで, いわゆる Early theatre spectacle (初期の上演劇) で, 1866年に始めて, 物語りを交えて上演された「狂想音楽劇」(extravaganza) で, アメリカでそれより以前この劇程人気を博したものはなかった。16ヶ月のランで百万ドル以上を稼いだと言われる。この種 musical comedy (音楽入り喜劇) のアメリカでのステージ上演の最初のものと言われる。因に Crook film というのはギャング映画のことである。
- (14) bachelor's degree ; a Bachelor of Arts (文学士)・a Bachelor of Medicine (医学士)・a Bachelor of Science (理学士) ; 因に Bachelor の上位が Master (修士)・Master の上位が Doctor (博士) である。
- (15) Sinclair Lewis ; [sinkləʊ lɪːs] 'Main Street' (1920), 'Babbitt' (1922) 等の小説で有名で1930年にはノーベル (Nobel) 文学賞受賞した。
- (16) casement window engineer ; 開閉窓製作者 (比較 sash window (上げ下げ窓))。
- (17) smart folks ; <身なりの>きちんとした人々 ; 当世風の人々 ; ハイカラな人々 (the smart set) ; (社交会の) ハイカラ連
- (18) buffet supper ; [bʊˈfɪt sʌpə] 簡易夕食 (<buffet (列車内) 立食場) ; buffet lunch (客が自分で給仕して食べる) 簡易夕〔昼〕食。
- (19) luncheon ; 《特に正式の》午餐 ; lunch よりも形式ばった上品語 ; lunch (=lump of food) と, muncheon (<munch (馬が麦など, 猿がりんごなど) むしゃむしゃ食う) との混成語。
- (20) parlour ; [米] 《もと》家庭内の客を案内する最上等の部屋 ; [英] 《もと》客間, 《ホテルクラブ等の》特別休憩室 (いま) (一般に) 居間, 茶の間 (living room)。
- (21) home appliances ; [米] 《特に》家庭内で使用する電気製品〔器具〕。

- (22) homemaking ; 「家政」 <〔米〕 home-maker 主婦 (cf. 〔英〕 house-wife 主婦)。
- (23) ロングアイランド島 ; Long Island, 米国 New York 湾にある島。
- (24) funeral home ; 葬儀 (funeral serve) の祭礼を行うために賃貸しする建物および、その建物内の賃貸し部屋。
- (25) Thomas Colley Grattan ; アイルランドの作家・編集者、ヨーロッパ旅行記 Highways and Byways (公道とわき道) (3 巻 1823—7) で有名。
- (26) High Life ; cf. high-brow 〔米〕 学問や教養の高い人, 知識人 ; (軽蔑) インテリ振る人間。
- (27) Esquire ; [iskwáɪə] (手紙の宛名などで氏名の後などに付ける) 敬称 ; 私文書では略形 Esq., Esqur. を用いる。例えば Thomas Jones, Esq. (〔米〕 Mr. Thomas Jones) ; (もとは) Esquire は Knight の 1 階級下位の貴族の爵位を言う。
- (28) Citizen ; 州・国家特に共和国の一員で完全な市民権を持ち、国家に対する忠誠の義務ある人間。
- (29) Russian Revolution ; その結果 Rússian Soviet Föderated Sôcialist Republic (ロシア・ソビエト・連邦社会主義・共和国 (略して R. S. F. S. R.)) が生れた。
- (30) Comrade ; Comrade [Sp.] = chamber fellow (同室仲間)。
- (31) the Honorable ; イギリスでの適用法を参考までに記しておこう。〔敬称〕 閣下 ; 1) 伯爵以下の貴族の子, 2) 女官, 3) 高等法院判事, 4) 下院議長, 5) 植民地の (立法評議会) 議員。
- (32) Druids ; デウルーデウ教徒 ; (特に) 英国に入った古代ケルト族 (Celt), ゴール族 (Gaul) の間に行われたデウルーデウ教の僧侶・予言者・裁判官・妖術者など。
- (33) Patricians ; (古代ローマの) 貴族 (比較 plebeian [plɪbɪːən] 庶民・下層階級の人間)。
- (34) chivalry ; (中世の) 騎士制度 (忠君・勇気・仁愛・礼儀・などをモットーとする制度) (the age of chivalry 騎士道時代 (欧州 10—14 世紀))。
- (35) promise suits ; promise = to predege to give in marriage (娘を) 嫁にやる約束をする。
- (36) caste ; [káːst], [米] [kɑːst] 1. カスト, 階級インドの世襲的階級 ; 僧・士族・平民・奴隷の 4 階級 ; 2. 排他的〔特権〕階級, その身分。
- (37) chaperone [ʃæpəroun] シャペロン ; (若い婦人や若者が社交界に出る時の) 付添人で、通常は年配の婦人。
- (38) Industrial Revolution ; 18 世紀末から、英国を中心に、機械・動力などの発明をきっかけとして起った社会組織上の大変革 ; これで封建制度が崩れ資本主義

制度が確立されていった。

- 39 Frederick Marryatt ; (1792—1848) 英国の海軍大佐 ; 'Mr. Midshipman Easy' (1836) の著作がある。
- 40 high school ; 小学校入学 1 年から数えて 12 年の学校生活のうち, 上部第 8 年級または第 9 年級以上の学年で専門科目 (または職業科目) を教える学校。
- 41 prostitution ; 売春 ; <prostitute (売春する)> <ラテン語: prōstitūt-(us,), p. p. of prōstituere—to offer for sale (身を売る)。>
- 42 assignation [æsignəʃən] (assign [əsaɪn]) 割当て, 時を指定する) [米] あいびきの約束。
- 43 brothel ; 女郎屋 (昔は brothel ('s) house といった。brothel は worthless person (女郎))
- 44 cat ; cat-like=noiseless, stealthy.
- 45 fancy woman ; (fancy=love) 女郎 (prostitute)
- 46 bag ; a prostitute <a woman's douche [du:ʃ] (灌水器)
- 47 powder room ; (特に婦人の) 化粧室・婦人用洗面所 (そこで頭髮や, かつらにおしろい粉をつけた)。
- 48 Prohibition ; (参考) Prohibition Party [米] 禁酒党 (酒類の製造販売禁止を政綱として 1869 年に結成された)。
- 49 Nathaniel Hawthorne ; Twice-Told Tales (1837) ; The Scarlet Letters (「緋文字」1850) などの著作で有名な米国の小説家。
- 50 Evelyn Waugh ; 犀利な諷刺の筆を以て, ロンドンの有閑階級の暗黒面を剔抉している。Decline and Fall (1928) ; Vile Bodies (1930) ; Black Mischief (1932) などの他, 傑作 A Handful of Dust (1934) などの物語を書いた。
- 51 Mark Twain ; Tom Sawyer (1876) (トムソーヤの冒険), Life on the Mississippi (1883) その他の物語りを著作した。
- 52 ain't ; 本文中に示した説明のほかに, ain't は, 教育ある人間の日常談話に使う会話体で am not の縮約語。

参 考 文 献

- The Oxford English Dictionary* (1933) Oxford. Clarendon Press.
- Webster's Third New International Dictionary*. Springfield, Mass. G. & C. Merriam Co.
- Compton's Pictured Encyclopedia*. Chicago. F. E. Compton Company, Division of Encyclopedia Britannica, Inc. 15 vols.
- Britanica World Language Dictionary*. Chicago. Encyclopaedia Britannica, Inc.

- American English* by Albert H. Marckwardt (1958)
Webster's New World Dictionary of the American Language (1964)
The Columbia Encyclopedia (1963)
A Dictionary of Americanisms on Historical Principles edited by Mitford M. Mathews (1956)
Chamber's Twenty Century Dictionary edited by William Geddie (1964)
Dictionary of American Slang by Harold Wentworth & Stuart Bery Flexner (1967)
The Random House Dictionary of the English Language edited by Gess Stein (1966)
A Dictionary of Modern American usage by H. W. Horwill. Printed in Japan (1958)
Kenkyusha's New Collegiate English-Japanese Dictionary 研究社
Sanseido's College Crown English Japanese Dictionary (昭和42年) 三省堂
英語英文学講座・アメリカ英語・歴史的及び地方的研究, 重見博一, 英語英文学刊行会 (昭和9年)
英語英文学講座・英語と米語, 富田義介, 英語英文学刊行会 (昭和8年)
現代アメリカ英語の研究, 岩崎良三著, 小学館 (昭和21年)
現代米語文法, 尾上政治, 現代英文法講座 (昭和32年)
米英語対照辞典, 竹中治郎著, 篠崎書林 (昭和27年)